



# JUDGEMENT

---

## scene-6

---

鳴海はるか

---

「はあっ、はあっ、はあっ・・・。」

菜奈は走っていた。

何とか奴等の結界から抜け出すことはできたが、向こうの能力がいまだほぼ分からないうえに  
一対二だ。

できれば今日はもう出会いたくない。

今回の戦闘で自分の身体能力がすでに人間が持つそれではないことは分かった。しかしそれは  
相手も同じことなのだ。

相手が一人なら何とか戦うこともできたかもしれない。しかし実際にはそれでも不安だった。

なぜなら、菜奈は今まで一人で戦ったことはなかったからだ。それに実戦経験もそんなにある  
わけでもない。

ベルフェとフルーレの助けが欲しい。しかし今彼らは負傷してとても助けを得ることができ  
ない。

それでも彼らに会えば、何か助言をもらうことくらいはできるかもしれない。

そうやっていろいろ考えているうちに、なんとか無事家まで辿り着くことができたのだった。

ひとまず安心を得ることのできた菜奈は、明日からの対策を考えながら眠りへとつくのだった

。

翌朝、菜奈は役目を覚ますと、昨晚閃いたアイデアを試していた。

「うんうん。思うほど上手くは動けないかもしれないけど、少しは使えるかも？」

そして今日は学校を休むことにした。無論ベルフェとフルーレの元へ行くためだ。

家を出ると一応周囲に気を配りながら歩いたが、やはり明るいうちには神は姿を見せないら  
しい。

「本当に人間の考えてる神と悪魔の印象って逆よね。」

考えていたことをそのまま口にしながら歩いていくと、前方にキョロキョロと何か探している  
風な男の姿が見えた。

菜奈はひよっとして神かと身構えたが、そのような気配は感じなかった。

何しろ神のように胡散臭い感じはまったくなく、むしろ好青年という印象だった。

それでも訝しげな視線を投げつける菜奈に気づき、向こうから菜奈の方へ近づいてきて話しか  
けてきた。

「すみません。この付近に古い洋館があると聞いたのですが、どちらにあるか知りませんか？」

「洋館ですか？噂では聞いたことがあります但それ以上は・・・。」

洋館の事を聞いてきたので菜奈は知らない振りをして話をはぐらかそうと考えた。

神ではないかもしれないけれど、用心するに越したことはないだろう。

「それじゃ、私はこれで。」

菜奈は適当に手を振りながらその場を離れようとした。が、その手を急に掴まれた。

しまった！ひよっとして新手の・・・！？

「お嬢さん、ひよっとしてですがこの僕と以前会ったことはないですか？」

二人の間に沈黙が流れる。

「・・・は？いえたぶん会ったことないと思いますけど・・・。」

「いえ、そんなことはないはずッ！貴方とは前世からの深い縁が見えます！そう、1万年と2000年前ほど前からでしょうか？」

「まったく言ってる意味が分からないんですけど、人違いじゃないですか？」

これは敵じゃないけどもっと厄介な相手かも。菜奈はそう思いつつ深い溜め息をつくのだった。

「・・・はあっ。どうしてこんなことになってるのよ。」

菜奈は今日何度目になるか分からない、深い溜め息をついた。

そんな彼女の傍には、いまだ身元の知れない男が飼い犬のようにつき従っていた。

彼を撒こうと菜奈はあちこち逃げ回ったが、苦労も虚しく繁華街にいるのだった。

「どうも溜め息ばかりついているみたいですがどうかしましたか？ひょっとして体の具合が悪いとか？それなら休憩を取ったほうがいいですね。ほら、ちょうどあそこがいい場所が――」

話途中で彼の顔面に菜奈の裏拳がクリーンヒットする。彼の指差す先にはまだ明るいというのに輝くネオンが見えた。

「そんなシャイなところも魅力的ですよ。さあ、二人で愛を語らしましょう！」

刹那、菜奈の裏拳が顔面を捉えた。

鼻血を垂らしながらも彼はなお菜奈に話しかける。

だがそこにはもう菜奈の姿は無かった。

「あれ？美しいお嬢さん。どこへいかれたのですか？」

彼はキョロキョロと周りを見回しながら雑踏の中へと消えていった。

「・・・ふう、やっといなくなった・・・。それにしてもあいつなんだったのかな？邸のこと聞いてきたかと思えばナンパしてくるし・・・。」

菜奈はビルの屋上から眼下を見ながら呟いた。

神か悪魔の関係者かと思ったけれども、今の菜奈の動きについてこれていない。

カメラとかの撮影機材なども持っていなかったしマスコミ関連でもない感じだ。

「うーん、やっぱりただのチャラ男かな？」

金網に背を預け、携帯を見た菜奈は愕然とした。

「ちょっと・・・もう5時？あの男のせいで一日無駄になった・・・。」

さすがに今からベルフェたちの邸へ行っても帰るのは夜になってしまう。今日はあきらめるしかなかった。

「結局学校サボっただけとか・・・マジ凹む・・・。」

それでもしばらく一人文句を言いながらも、暗くならないうちに菜奈は家路につくのだった。

「昨日は散々な目にあっただけで今日こそは邸にいかないと・・・あー、でも学校を連続でサボるわけにも行かないし・・・。」

一人唸りながら菜奈は悩んでいた。

部屋の中をぐるぐる歩き回っていた菜奈は意を決して立ち止まった。

「うん、今日はやっぱり学校に行こう。あんまり普通じゃない生活を送るわけにはいかないもんね。」

菜奈はそう決めると学校へ行く準備を始めた。

「今日は学校終わるまでは余計なことは考えずに過ごそうかな。最近色々ありすぎて本来の生活からかけ離れてきてるし。学校終わってから普通にベルフェたちのところに向かえば十分時間あるよね。」

久々の学生らしく過ごした学校生活は楽しかった。

もちろん本当に何も気にせず楽しめたのかと聞かれたら、そうだとは言い切れないのは確かだった。

でもいつも気を張り詰めっぱなしで暮らさなくてもいいのかもしれないと、菜奈は思った。

放課後を告げるチャイムが鳴る。

菜奈は大きく伸びをするとカバンを持って立ち上がった。

級友から遊びに行こうと誘われたが、それはもう断ってあった。さすがに遊びに行けるほど時間に余裕はない。

靴を下履きに履き替え校門をくぐった。

そこで菜奈は人ごみの中に見たことのある人影を見つけてしまった。

「・・・昨日の男だ。あいつ、何者・・・？」

見つかると面倒なことになりそうだと思う菜奈は物影に隠れようとした。だがその背中に声が掛けられる。

「そこにいるのは昨日のお嬢さんじゃないですか。ちょうどよかったです。貴女をお探ししていたんですよ。」

菜奈は何も聞こえないふりをしてそのまま男の横を通り抜けようとした。

菜奈へ男の手が伸びてくる。

それを流れるような動きでかわすと菜奈は男へ向き直った。

「いきなり無防備な女の子へ向かって掴みかかってこようとするなんてどういう了見かしら？あまりしつこいようだと人を呼びますよ？」

男は見事空ぶった自分の手を不思議そうに見ながら静かに話しかけてきた。

「いえ、貴女に何か危害を加えようというわけじゃありません。ただ昨日も行ったとおり、あなたに洋館の場所を聞いたかっただけです。」

「そんなの他にいくらでも聞ける人がいるでしょう？私は昨日洋館の場所は知らないと言ったはずですけど？」

彼は顎に手をやり考えていた風だったが、やがて考えがまとまったらしく背を正すと菜奈の方へ手を差し出してきた。

「事情はよく分かりました、お嬢さん。私としたことがすっかり失念していました。私が貴女をエスコートしましょう。」

菜奈はその差し出された手を見て呆然とした。

「いきなりこのように人目のある場所で手をとるのは恥ずかしかったですか？それなら僕は貴女の傍でさりげなくエスコートしましょう。あなたは犬の散歩でもするような軽い気持ちで歩いていただいて構いません。」

だめだコイツ、はやくなんとかしないと・・・！

「菜奈ー！そんなところで何やってるの？誰？このイケメン！菜奈の知り合い？まさか彼氏とか？私たちにも紹介してよー！」

そんなところへ菜奈の級友が通りがかって群がってくる。

一瞬菜奈はまた面倒なことに、と思って溜め息をついた。

だが、これは使えるかもしれない・・・！

「みんな、この人何か困ってるみたいなんだけどあたし今から用事あるから急いでるんだー。だからお願い聞いてあげてよ。上手くすれば彼氏にできるかもよ？(ボソッ)」

最後のほうは内緒話のような声のトーンになっていたが、みんなに内容はきっちりと伝わったようだった。

皆が一斉に目を輝かせながら男に群がっていく。

すぐに男は女の子の輪によって動きを封じられた。そして菜奈は悠々そこを脱することができた。

後ろから菜奈を呼ぶ声が聞こえた気がしたが、彼女はそのまま校外へと歩き出したのだった。

一人になった菜奈は悠然と邸までの道を歩いていた。

「さーて、今日はこれで無事邸まで行けそうね。」

菜奈は大きく伸びをしながら軽い足取りで邸までの道を歩いていた。

折角だから何かお見舞いに買って行ってあげようかな？などと考えながら。

その時までは。

そこで気付いてしまった。

周りに自分以外の人間の姿がないことに。

異常なほどの静寂に。

「―――これは？結界？でも結界が張ってある感じはしなかった・・・。」

「そう、結界じゃありませんよ。これは人払いをしているだけです。結界ではすぐに我々の存在がばれてしまうと思ったのでね。」

菜奈の目の前には忽然と二つの見覚えのある影が姿を現していた。

先日の二人組、アッサラコスとイーロスだ。

「どうやらお前はまだ仲間に俺たちのことを知らせてないみたいだな？」

「そんなことあんたたちに分かるの？今だって私が困なのかもしれないじゃない？」

菜奈は相手を動揺させようとハッターリを言う。だがそれは一笑に付された。

「ハッターリを言って俺たちの動揺を誘おうって魂胆だろうが、生憎とそんな手は通じない。これでもそちらの動向にも気を配っているものでね。」

そしてイーロスがその長い袖を少し上に持ち上げた。

一瞬その袖口から陽光を反射するものが見え隠れした。

そしてあたりに結界が張られていくのが感じ取れた。

「どうしても私とやりあいたいってワケね。」

菜奈はやれやれ、といった感じで胸元のペンダント化された使い魔から刀を取り出す。

それに応じるようにアッサラコスとイーロスも戦闘体制をとるのだった。

双方が距離をじりじりと詰めていく。

だが前回の戦闘で、アッサラコスの獲物の射程が長いということは分かっていた。

そしてイーロスのほうはいまだ杳としてその全容が知れない。

どちらにしてもやはり菜奈は自分の刀の射程圏内まで飛び込む必要がある。

「どう考えても分が悪いですね。これは。」

闖入者が現れた。

結界の中であるこの空間に。

双方の間に緊張感が走る。

ここに今来たということは、神か、悪魔か。

「お嬢さん、だから僕を邸まで案内してくださればよかったです。僕がいればあなたをこんな危険な目にあわせはしませんよ。」

菜奈ははっとしてその男の顔を見る。

それは間違いなくあのナンパ男だった。

ナンパ男は菜奈の隣まで来ると、サムズアップしてとびきりの笑顔を菜奈に向けた。

「可憐な貴女のおそばでいつもにこにこグッドスマイル。地獄の大君主にして公爵、プルフランスです。プルちゃんと呼んでね♪」

「はあ。」

菜奈はプルのあまりの場違いなテンションに気を削がれてしまう。

それは向こうも同じようだったが。

「さてさて、そっちの二人がおいたが過ぎた悪ガキですか？女の子一人にいい大人が二人掛かりとは感心しないなあー？」

「ふん、勝手に言っておけ。勝者こそが正義。これこそ遥か昔より変わる事のない真理であろう。」

プルはその答えに軽く肩をすくめて見せる。

「まあそうですね。元を辿れば原始の神と悪魔の戦いよりそれは端を発している。」

言いながらプルは目の前の空間におもむろに手を突っ込んだ。

その手を引き戻すと、長い鎖、そして最後にそれに繋がる棘付きの巨大な鉄球が地面に音を立てて落ちた。

その鉄球にプルは思い切り踏みつけるようにして足を掛けた。

「それでもな？お前たちじゃー残念ながら俺様の相手にならないわけよ？わかる？俺が勝者！俺が正義なんだよっ！」

プルの態度が一変した。菜奈は思わず隣の彼の顔を窺った。

先ほどまでの柔和な笑みを浮かべるプルはそこにはいなかった。

その顔には柔和な笑みと引き換えに、残酷な笑みが浮かんでいた。

菜奈は背筋が一瞬寒くなるのを感じた。

だがプルは菜奈の方を向いたかと思うと元の柔和な笑顔だった。

「お嬢さん、あの二人は僕がお仕置きしておきますから安全な所で見ていてください。終わったら洋館まで道案内よろしくお願いします。」

それだけ言うと敵に向かっていこうとするプルを菜奈は慌てて止める。

「ちょっと待った！1対1ならあたしだってやれると思うよ？せめて一人ずつ分担したほうが良くない？」

「そうかもしれませんが、ここは僕に任せてもらえますか？女性を危険な目に合わせるのが僕は嫌いなんですよ。」

向こうもじっと黙って聞いてはいたものの、ついに堪忍袋の緒が切れたらしい。負けじと怒鳴り返してきた。

「うだうだうるせーんだよ！そんなにうでに自信があるのならこっちも大盤振る舞いで遊んでやる！来い！天使ども！」

ぞろぞろと天使が降りてきた。10体ほどだろうか。

「・・・。」

菜奈はプルの方をじと目で睨んでいる。だがプルのほうはまったく気にしていないようだった。

「・・・はあ。じゃあ神の方は任せるから私は天使を叩く。OK？」

「僕一人で天使も全部相手にするんですが……。分かりました。天使の方はお任せします。もし危なそうならすぐに引いてください。僕が残りは引き受けますので。」

「OK。それじゃあんまり長引かせるのも好きじゃないからそろそろ行くわよ。」

菜奈はそこでペンダントから短めの刀――脇差を取り出し左手に握った。

「二刀流というヤツですか？僕も見るのは初めてです。」

「実は私も実践で使うのはこれが初めて。！来たわよ！」

早速突っ込んできた天使を、菜奈が一刀両断にする。

「素晴らしい腕前ですね。それでは僕も行きます。――おい、その雑魚二人！手前らはこのオレ様が泣かせてやんよ！」

「雑魚だと！？どっちが雑魚か思い知らせてやるぜ！」

アッサラコスの鎖が飛んでくる。それはあっという間にプルの元に到達しようとしていた。

「うぜえ！」

プルはその鎖の先端を裏拳で思い切りはたいた。

その鎖は勢いはそのままに、近くにいた天使に直撃する。

ぐちゃ！と嫌な音を響かせながら天使は跡形もなく吹き飛んだ。

「なんだなんだ！？お前ら同士討ちしにここまで来たのかよ！？」

だがプルの煽り文句に対する反応はなかった。

ただ神側は沈黙している。

「どーしたどーしたァ！？まさかオレ様の強さにびびっちゃまったのか？それならお前らついてるな！今日はオレ様は凄く機嫌がいい。今のうちにどこかに消えな。見逃してやる。」

菜奈はこの男の豹変振りに驚きながらも向こう側の反応を窺う。

菜奈の予想に反して向こうは反論してこなかった。まさか——？

「ふむ、その提案受けてやらないこともない。」

イーロスが口を開いた。その言葉をふんぞり返りながらプルは聞くのであった。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本作はショートストーリーで月に一度の連載型式で続けていこうと思っています。  
現在病気療養のためのリハビリを兼ねての執筆ですので誤字脱字等あるかと思ひます。  
そういったことや、その他なんでもいいのでご指摘くださるととても嬉しいです。  
それでは、次回作でまたお会いできることを祈って――。

2013年9月1日

## JUDGEMENT scene-6

<http://p.booklog.jp/book/69727>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69727>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69727>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ